

和食の「いっしょ」、郷土食材の調理法を学ぶ

〜平成19年度大館・北秋田地域スローツーリズムセミナー

スローツーリズムセミナーが3月17日、市内のホテルで開かれ、野菜生産農家、料理店経営者など約100人が参加し、地域の食材を使った調理講習会や座談会などで、観光素材としての「食」のあり方を探りました。

セミナーは、滞在型・体験型観光を推進している北秋田地域振興局が、誘客手段として重要な「食」の部分に着目し、大館・北秋田地域の郷土食材の魅力や和食調理人の調理技術を学ぶことで地元の食材を再認識し、商品開発や地域振興につなげようと開催したものです。

セミナーは、ホテルニューオータニ幕張で和食料理長を務める井川比呂志さんの調理実演と、市民が井川さんと郷土料理の魅力などを語り合う座談会の2部構成で行われ、J A、商工会、



上 郷土料理を生かす心意気と調理技術を学んだ調理実演
下 山の芋をはじめ郷土の食材の魅力についての意見交換



北秋田森林組合の関係者、野菜生産農家、料理店・仕出し店の経営者など約100人が参加しました。

調理実演で井川さんは、「比内地鶏の山の芋蒸し山菜添え」「山の芋とペイナスの揚げ出し」の2品を調理。下ごしらえから味付け、盛り付けなど各段階でわかりやすく説明を加えながら、郷土料理を生かす心意気と調理技術を伝え、具体的なアドバイスに参加者はメモを取りながら聴き入っていました。

続いて行われた「持ち寄り郷土料理を囲んで座談会」では、地元・鷹巣地域で山の芋の生産と販売に関わっているJ A鷹巣町婦人部の主婦ら6名が講師を囲んで、山の芋の上手な調理方法や販売促進などについての意見交換を行ない、

井川氏は「郷土料理の良さは、足元では分からず外へ出されてその値打ちが出てくる」などと述べ、特産品は地元で愛されてはじめて外へ向かって成長していくものであることを強調。また、「よいものは地元の皆さんがこよなく愛し、いい素材にしている調理品に仕上げていく地道な努力が大切。これからも自身を持って生産に、販路拡大に精を出してほしい」と熱いエールを送っていました。

遺跡出土の緊張や喜びを語り合う

森吉の発掘調査を語る会

森吉の発掘調査を語る会が3月22日、森吉コミュニティセンターで行われ、これまで発掘調査に携わった約60名が参加し、調査の喜びや苦労を語り、思い出を振り返りました。

森吉山ダム建設に係る発掘調査は平成7年から始まり、今までに51ヶ所の遺跡が調査され、旧石器時代から江戸時代に至るまでの遺物や遺構が発見され、出土した遺物の量は、コンテナケースで約8千箱分にもなります。

発掘された遺物や遺構には、1万年以上前の生活の痕跡が色濃く残され、当時の森吉山の懐に抱かれた山間の地で山川の恵みを受け、外の地域と共通した文化の一翼を担っていた様子が伺えます。



13年間の発掘調査の歴史をスライドで上映し、思い出を振り返った語る会



入賞した菌床シイタケ栽培農家のみなさん（前列左から佐藤さん、九嶋さん、後列右から金さん、武石さん）

米内沢地区4農家が全員入賞

全国サンマッシュ生産協議会品評会

このほど行なわれた全国サンマッシュ生産協議会の品評会で、佐藤哲也（鶴田）さんが金賞、武石恒夫（日栄）さんが銀賞、金隆三（本城）さん、九嶋善一（鶴田）さんが銅賞と輝かしい成績を収めました。

米内沢地区で菌床シイタケを栽培している農家は4農家で、元々は原木を使用していたシイタケ栽培を行っていましたが、労力の軽減やシイタケの肉厚、食味の良さから菌床シイタケに経営を転換。1農家約6〜7千床で稲作期間が終わる10月から3月末までシイタケを採取しています。

金賞を受賞した佐藤さんは「今後、地元の栽培農家を増やし、菌床シイタケをもっと全国に広めたい」と豊富を語っていました。

春の訪れを知らせる炎

春彼岸「万灯火」

春彼岸の中日にあたる3月20日夜、合川・下小阿仁川流域の各地区で伝統行事「万灯火」が行われ、迎え火の放列が残雪の山間に浮かび上がりました。

万灯火は、墓地の他、山の尾根づたいや沢づたい、川原でたいまつを灯し、精霊がその火を道しるべとして家々に舞い戻り子孫のもてなしを受けるとされ、豊年満作、家内安全を祈願します。

最近では、「まどび」、「中日」の火文字や、回転式の車万灯火など趣向を凝らした仕掛けも登場し、万灯火を一目見ようと遠方から訪れる人も増えています。



芹沢地区で行なわれた「万灯火」。8月14日には合川橋付近で「合川まと火」が行われます

手作りモデルハウスでデモ

住宅用火災警報器説明会

住宅用火災警報器設置のモデルハウスを利用したデモンストラーション講習会が3月7日、吉田分館で行なわれました。

この講習会は、火災の早期発見、死傷者の抑制のため平成23年5月末までに設置が義務付けられた住宅用火災警報器の普及、啓発のため市消防本部阿仁分署が開催したものです。

実際にモデルハウスの1階部分で煙を発生させ、2階階段の感知器が煙を感知するのを見て、参加した約30名の住民らは、各地で火災による死者が多発していることから「早速警報器を注文して取り付けなければ」と、住宅火災の恐ろしさと、住宅用火災警報器の必要性を実感していました。



職員手作りのモデルハウスで住宅用火災警報器の必要性を訴えた講習会